



南の島から

受賞者…内田 善也さん

22時、自宅の布団で横になってテレビを見てみると携帯が鳴った。こんな時間に電話なんて急患かな。

ここは南の小さな島にあるへき地診療所。医師が常駐しないこの島に医療職者は看護師しかいない。看護大学卒業後、総合病院の救命救急センターで勤務した私は「病院に来て入院した時にはもう遅い、病院に来ないことが一番だ」。そんなふうを考え、予防医療の仕事をしようとこの島で働くことを決めた。「信頼される看護師」になろうと意気込んで船のタラップを降り、ワイルドで屈強な島民の方々に迎えられた時、この場所で自分に予防医療なんてできるのだろうかと思がすくんでしまったことを今でも覚えてる。診療所の2階に住み始めてからもうすぐ1年。日々の診療所業務やたまに起こるヘリでの急患搬送であつと

いう間に月日が流れてしまった。予防医療への強い思いは全然形にできていない。この前、港で「熱中症予防教室」を開催したけれど、島民の方へ思いは伝わったのだろうか。そもそも「信頼される看護師」になれているのだろうか。鬱屈とした日々が続いていた。

電話はワイルドで屈強な島民の方からだった。「お前が港でやった熱中症予防教室。あの時作った、経口補水液のレシピ教えてくれよ。外作業で汗かくから。熱中症になってお前に迷惑かけるわけにいかないから」。思いが形になった瞬間だった。このために島へ来たんだ。熱い何かが込み上げた。私は得意気に経口補水液のレシピを伝えた。電話を切り、時計を見ると22時。ワイルドな時間だなあ。でも、心は満たされていた。

「信頼される看護師」なんて簡単に言うけれど、形には見えないから難しい。この1年で名前を呼んでくれる人や診療所にコーヒーを飲みに来る人が増えた。「信頼される看護師」になれたのかは今でも分からない。それでも今、この島に住む人が健康で暮らせるように全ての情熱を注ぎ、仕事をしたいと強く思う。私は今、看護師として働く喜びと幸せを感じている。